

旗手たちの青春

あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志

矢代静一

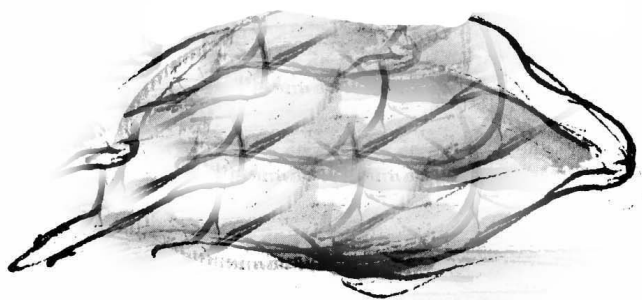


新潮社版

旗手たちの青春

あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志

矢代静一



新潮社版

旗手たちの青春 きしゅのせいしゅん

——あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志



著者 矢代静一 (やしろせいいち)

一九八五年二月一五日 印刷

一九八五年二月二〇日 発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 東洋印刷株式会社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一一〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Seiichi Yashiro Printed in Japan. 1985

ISBN4-10-325704-0 C0091

旗手たちの青春 目次

はじめに 7

第一章 その死 9

第二章 その戦争 20

第三章 その出会い 36

第四章 その雌伏時代 51

第五章 その初上演 66

第六章 その初演出 82

第七章 その仮面 99

第八章 その研究所 115

第九章 その「雲の会」

131

第十章 その病い

146

第十一章 その夜の宴

164

第十二章 その傷心

179

第十三章 その神

195

第十四章 その鎮魂

211

第十五章 その主人公

229

参考文献

234

あとがき

236

装幀／野見山曉治

旗手たちの青春

——あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志

はじめに

この作品に登場する三人の青春の担い手が過ごした日々は、敗戦前後の混乱期である。そして、戦争中から今日只今までの日本の外的変貌はいちじるしいから、三人（私を含めて四人）よりも若い世代に属する人たちの青春とは、それぞれ違うものであるに違いない。その上、人それぞれによって固有の青春というものがあるし、又、人によっては、「青春なんてなかった」という感慨を抱いて若き日を回想する人もいよう。「青春なんてない」といま若き日を生きている人もいよう。

にも拘らず、私は、本文の中でも記したが、「青春はあった」もしくは「青春はある」と信じるものである。そして、各人各説であるにせよ、共通点はあると思う。それは、「ひたむきに生きた（る）」「ひたすらに生きた（る）」ということだ。この場合の「ひたむき」「ひたすら」はいわゆるマジメ用語だけを意味するのではなく、「ひたむきに遊んだ」「ひたすらに怠けた」という使い方も入る。

この作品を昭和五十九年九月号の「新潮」に発表したあと、加藤道夫のことが案外知られてい

ない——ことに若い人たちに——ことを教わった。無理もない、加藤の死からもう三十年以上もたっているし、新劇や戯曲の翻訳という狭い小宇宙の中で生きた人だから。そして、加藤こそ、言葉の正確な意味で、「ひたむき人」^{ひと}「ひたすら人」^{ひと}であった。この作品を論じた菅野昭正氏の文章を借りれば、「あの戦後の活気にあふれた文化的時代をよみがえらせるのに成功した」青春を送った人であった。

第一章 その死

三島由紀夫から始めよう。

「前日親子最後の別れの日、夜十時ごろ僕は茶の間で本を読んでおりました。そのとき、突然伴がテラスから座敷に上って来ました。僕の家と伴の家とは、まあ廊下づたいのようなもので、洋館嫌いの老夫婦は木造家屋に住んでいて、絶えず往復している関係です。ちょっといつもやってくる時刻と違うな、と思いました。やって来るといつもは積極的に話題を提供して大きな声で笑いながら話をしていくのに、今晚はちょっと違っていました。(中略)『お休みなさい』という極めて簡単な会話があり、伴は立ち上りました。その時僕はかねて注意しようと思っていたので、ピースを一日何本のんでいるかと聞きました。

『まあ、一日三、四十本です』

『健康のことを考えてすこし自制することはできないのか』

これに対して伴はただ一言、

『うん』といって苦笑をしただけでした。おやじは何を諺言うわごと言っているのだ、一日百本千本のん

でもこの命は一体いつまでこの世にあると思っているのだろうか、と言いたかったところでしょう。これが親子今生の別れで、これ以外の対話は一言もありませんでした。本当に味気ないものでした」（平岡梓「倅・三島由紀夫」）

こうしていま書き写してみると、家の構造も夜ごとの訪問も、煙草の吸い過ぎも、私と私の親との関係とそっくり同じである。違うのは、私には三島のような豪傑笑いはそらぞらしくて出来ないことと、彼が自刃して十四年たつたいま、私がつつがなく生きていることである。もう一つつけ加えると、私のような凡庸な人間——これは卑下でもなく、むろん自負でもない——は、死の前、親に対して彼のような態度はとれないということだ。

感傷的になったついでに言えば、築地本願寺の葬儀のとき、私は知人に会いたくなくて、一般焼香者にまじって、二時間ほど並び、ようやく献花したとき涙ぐんだ。私のまわりには老若男女が押しあいへしあいしていた。私は「平岡よ（註 三島由紀夫の本色、平岡よ、さよなら）」と思いきって声に出して言ってしまった、まわりの人に聞こえはしなかったかと、一瞬はすかしく思い、いいえ、すこしもはずかしいことではないのだといきかせた。それから、自動車に乗って一人で帰るのはなんだかつらくて、見知らぬ人たちがたくさん乗っている地下鉄で、まっすぐ家へ帰った。私は一生、けわしい心をもつことはないだろう。

この一文は彼が自決した翌年、「平岡君への弔辞」と題して、雑誌「自由」六月号に私がした

ためたエッセイの末尾の文章である。「一生、けわしい心をもつことはないだろう」というのは、死者になった彼への誓いの言葉であった。

三島由紀夫は昭和四十五年、四十五歳で去って行った。

加藤道夫は昭和二十八年、三十五歳で去って行った。縊死である。三島の場合は夭折とは言い難いが、加藤の場合は夭折と言ってよいであろう、仕残した仕事がたくさんあったから。

その加藤について三島が回想している。

「芝居の仕事の悲劇は、この世でもっとも清純なげれない心が、一度芝居の理想へ向けられると、必ずひどいめに会うのがオチだということである。(中略)私は正直、加藤氏を大劇作家とも大劇詩人とも思っていないが、誇張なしに言って、戦後今までに接した多くの芸術家のなかで、氏ほど純にして純なる、珠のごとき人柄は見たことがない。それがまた、氏をして、大劇作家たらしめなかった主な理由であったかもしれない。私などは加藤氏に比べれば、ずっとスレッカラシの不純な人間だが、不純な人間は不純なりに傷つくもので、そのためには心に鎧を着なくてはならぬ」(三島由紀夫「私の遍歴時代」)

ざっと読むと、三島は自分のことを「スレッカラシ」と自嘲しているが、ゆっくり読むと、ちゃんと「加藤氏と比べれば」とことわっている。加藤に比べれば誰でもスレッカラシである。三島は処世智にたけていた男であったが、それは生きて行く上の必要悪であって、三島は本質に於て「純にして純なる男」であった。むしろ加藤は、青春時代が終る頃になっても幼児性を捨て切れなかった人だったという言い方をしたい。

ここで、私の古日記を紹介したい。

昭和二十八年、十二月二十三日

昨夜、加藤道夫、自宅で縊死自殺（註一）

治子ちゃん宛の遺書に「僕は幼にして罪を犯され、その記憶が、いまに忌わしく、地獄の苦しみ……」（註二）

十二月二十五日

道ちゃん告別式、寒かった日である

十二月二十六日

芥川来談、治子ちゃんのこれから先のことが気がかりなり（註三）

十二月二十八日

道ちゃんの形見として、ネクタイもらう

補足したいことがあるので、註をつけた。

註一 最後に会った月日は覚えていないが、場所をはっきり覚えている。有楽町駅近くの、いまはもうないが「レンガ」という喫茶店であった。私が酒好きなのを知って、ビールを注文してくれ、あまり飲まない加藤が、「僕も一杯だけつき合うから、おいに飲みたまえ」とやさしく、つづけて、「僕はこのごろ、体中の関節がはずれたみたいで、チャップリンみたいな歩き

方しかできないのだ」とユーモラスにささやいて、私を笑わせた。

註二「治子ちゃん」とは女優で加藤夫人のこと。たいへん取り乱していて、私に読んでくれと言って手渡した。私は「地獄の苦しみ……」まで読み、あとは読まずに返した。なにか恐ろしかったからである。

註三 私の処女戯曲と言ってもよい「城館^{しちかん}」が文学座アトリエ公演で上演されることにきまり、ヒロインの恵子という役を治子が演じることになった。しかし、恵子は幕切れで自殺する。治子には、あまりにもいたましいので、岸田今日子を代役に立てた。

加藤がなぜみずから生命を絶ったのか、その幼児体験が遠因としても、近因はなにか。それはいまに至っても分らない。三島の割腹にしても同様である。そこに辿りつくまでの外側の筋書は、一応明らかにされているが、彼の精神の深部での動きは、もっとドロドロした混沌としたものであろう。まことに父上平岡梓が語っているように「なぜこんなに死を急いだのでしょうか、あえて永遠に何人にも解かせない謎として遺していったものなのでしょうか」なのである。

「午年の作家の感想」というエッセイを加藤は残している。死の三週間ほど前に書かれたものだ。「この数年間をふりかえってみて、自分は随分いい加減な生き方をして来たものだと思う。人間は自分を取り巻く《社会》と云う実は極めて不自由な限界状況の中に拘束されている。そうしなければ生きて行けないのだ。うまく生きて行くことは、うまく拘束されて行くということだ。例えば作家は注文に追われて生きている。追われなければ彼は社会的地位を確保出来ないのだが、

実は多くの作家はその為に内面的には段々死んで行くのではないかという気がする。我国の文化・経済の狀態がそうさせるのである。(中略)生来神経の弱い僕などは来る日も来る日も唯書かねばならぬと云う恐迫觀念に取り憑かれている。健康の狀態が書くことを拒み始めると一種のノイローゼに襲われて、完全な無為の狀態が来る。……三度目の午年を迎えて、せいぜい健康になつて、のんびり落伍しないように努力したい、と思つてゐる」

正直な告白である。「いい加減な生き方をして来た」「生来神経の弱い僕」「恐迫觀念に取り憑かれてゐる」などの想いを一度も抱かなかつた作家はいないだろう。しかしである。いまの私はスレッカラシであるから脇に置いて、三十五歳のときの私を思い出してみても、やはり、こういうメメシイ文章は發表しなかつたろう。心屈していても、自己輜晦したことであらう。「せいぜい健康になつて、のんびり落伍しないように努力したい」にいたつては、まるで中学生の日記ではないか。三十五歳の當時の加藤は、九歳年下の私から見ても、充分「社会的地位を確保」できていたのである。

加藤の無二の親友であつた芥川比呂志は、このエッセイに触れて書いてゐる。

「死後にこういう文章に接してみると、彼のその『一種のノイローゼの狀態』について、思い当る節もなくはない。しかし、彼は生活の上でも文学の上でも、そういう苦しみを、決して安っぽく売り物にしたことはなかつた」(決められた以外のせりふ)

となると、このとき既に加藤の精神は弛緩してゐたのかも知れない。

昭和二十四年に、芥川と加藤と私は、文学座文芸演出部員になつた。三島が入座したのは昭和